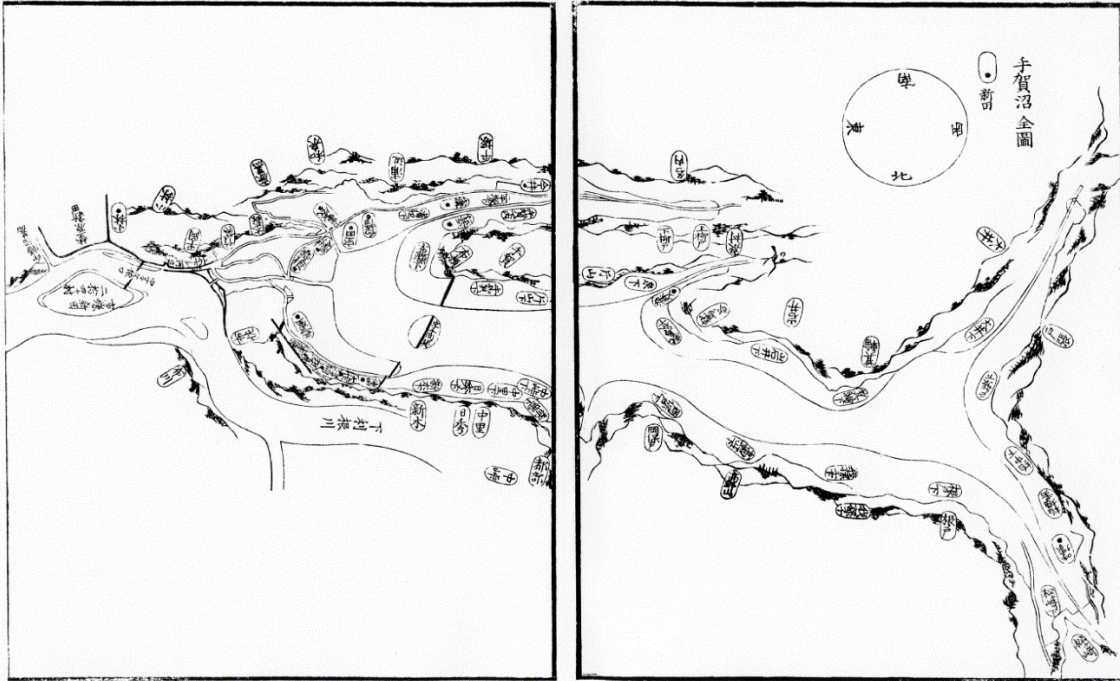


木下交流の杜歴史資料センターだより

第3号

～手賀沼の干拓と治水～



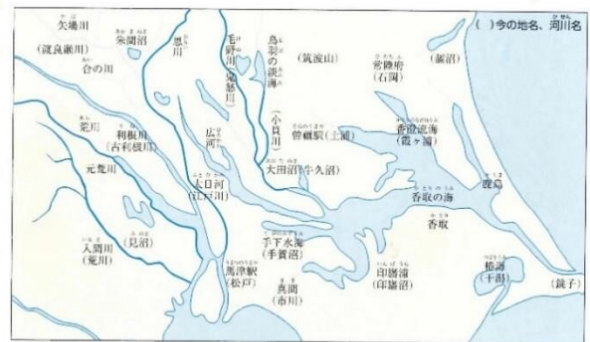
【手賀沼全図】『利根川図志』巻三 『印西市歴史読本 中世・近世編』より転載

最近、記録を塗り替えるほどの異常気象と災害が各地で発生し、地域住民は困難を強いられています。自然の脅威は我々だけでなく、先人たちも幾度となく苦しめられてきました。今回は、先人たちが数百年にわたって戦ってきた手賀沼に関する干拓と治水の簡単な歴史をご紹介します。

1. 利根川の東遷と手賀沼の形成

印西市の北には、坂東太郎と呼ばれる日本一の流域面積を誇る利根川が河口の銚子へ向けて悠然と流れています。しかし、今から400年ほど前までは現在の東京湾に注いでおり、霞ヶ浦や印旛沼などと利根川下流域一帯は「香取の海」と呼ばれた内海が形成され、その頃の手賀沼は「手賀浦」「手下水」「手下水海」などと呼ばれていました。

江戸時代初期になると、現在の東京湾へ流れていた利根川を、小川川であった常陸川と結ばせて銚子・太平洋に向かわせる利根川の東遷工事が行われます。この工事は全行程を含めると文禄3年(1594)から承応3年(1654)まで約60年をかけて行われ、手賀沼が形成されました。

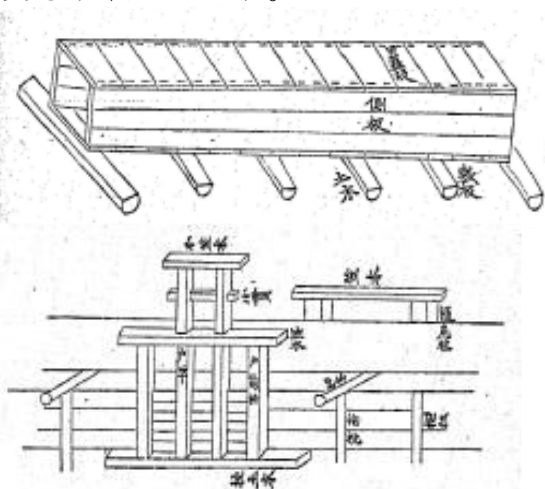


【香取の海】『印西市歴史読本 中世・近世編』より転載

2. 江戸時代の治水工事と干拓

多くの河川が集合して銚子へ流れた利根川は、大雨が降ると頻繁に増水するようになります。当初手賀沼は利根川と堤防で分離されていなかったため、利根川の出水時には大量の水が沼に逆流し、周辺の村々に甚大な被害を与えることになりました。水害を防ごうと利根川東遷後すぐの寛文2～6年(1662～66)には、河川幅が狭い布佐・布川間を締め切り、現在の茨城県布川地先から新利根川を開削しますが、川底が浅く水流が直線的であったため河川流域の洪水被害が大きく、すぐ元の流れに戻すこととなります。

頻発する水害を防ぐためには、利根川との間に堤防を築き、手賀沼から利根川へ水を流す排水路と、水門の役割を果たす^{いりひ} 堰樋の設置が必要となります。排水路が開削されると干拓が進み、農地面積が広くなり、生産力が向上します。しかし、堰樋は排水をとめることで利根川の逆流は防ぎますが、大雨等による沼の内水を排水できないため、冠水が多発しました。また、近世期の堰樋は木製のため耐久性に乏しく、幾度も破壊されます。



【堰樋図】(『日本土木全書：工学図式』
国立国会図書館デジタルコレクション)

江戸時代の手賀沼干拓工事は、記録に残る主なものだけでも①寛文期(17世紀後半)、②享保期(18世紀前半)、

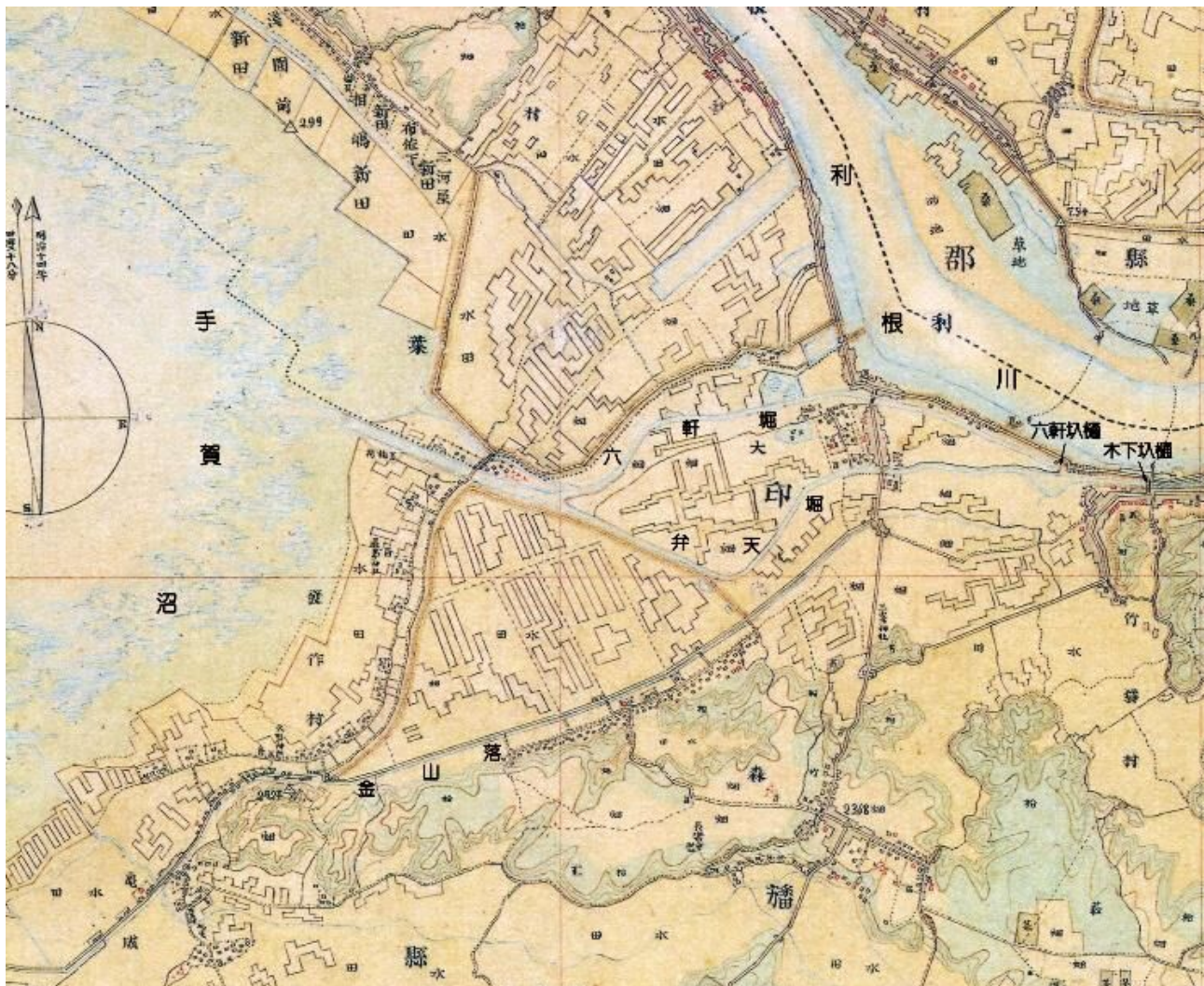
③元文期(18世紀前半)、④天明期(18世紀後半)など、何度も行われました。

最初の干拓工事は、①寛文12年(1671)から江戸・小田原町で鮮魚商を営む海野屋作兵衛と開発請負人16人によって、堤の築造と手賀沼落堀の開削などが行われました。利根川へ排水する堰樋を木下と布佐の2か所に設置しますが排水が十分ではないため、印旛沼へ排水するための水路(五ヶ村落し)の開削も行いました。

水路と堤ができたことで当初の目的である干拓が進みましたが沼周辺にとどまり、検地を実施するまでには至らず、実際には約60年後の享保15～16年(1730～1731)に新田が成立しました。一方この工事には多額の費用がかかり、海野屋以外のほぼ全員が撤退することとなってしまいました。なお、延宝3年(1675)に発生した利根川の洪水で堀は埋まり、堤も崩壊してしまいました。

次に大きな工事が行われたのは、②享保12年(1727)の幕府勘定吟味役・井沢為永と江戸商人高田友清による、浅間村(我孫子市新木付近)下の1000間の堤防(千間堤)の築造でした。千間堤の完成により、現在の柏・我孫子方面が上沼、印西方面が下沼にわかれることになり、干拓が進みました。また、この時、白井方面から市内浦部・亀成を流れる金山落や、沼の水を利根川へ排水できるよう沼の北側に水路を開削し六軒堀につなげる工事も行っています。しかし、元文3年(1738)に発生した洪水により千間堤が決壊し、沼は元の形に戻ってしまいました。

③元文4年(1739)には、金山落の流路変更や、布佐・大森間を流れる六軒堀と、木下地先を流れる弁天堀をつなげる又兵衛堀が開削されました。



【迅速測図 布佐村近傍】(『印西市歴史読本 中世・近世編』より転載)

④天明5年(1785)には、老中田沼意次による将監川の締め切り工事が行われますが、翌年には締め切りが破壊されてしまいました。

これらの干拓工事の他にも水路の流路変更や堤の築造、込樋の付け替えなどが度々行われましたが、治水技術が伴わなかったため、慢性的な水害に見舞われたまま、明治時代を迎えました。

3. 近代の治水工事と干拓計画

明治時代前期の工事は、度重なる洪水で運ばれた川底の土砂を取り除く浚渫などの低水工事が中心で、排水施設は江戸時代から受け継いだ木下の込樋と六軒の込樋を使用していました。また、当時の手賀沼落堀は、市内発作

で六軒川と弁天川に分流し、木下地先で合流、現在の銚子屋旅館の裏を通り利根川へ流れていました(上図参照)。



【六軒川と弁天川の合流部(現印西市立中央公民館付近)】

明治23年(1890)、利根川出水により六軒込樋が破壊されます。翌年には木下込樋を強固な煉瓦鉄扉で建設し、六軒込樋は廃止となりました。

明治時代後期の明治 29 年には、堤防の決壊による洪水被害が甚大となり、利根川堤防改修への課題が浮き彫りとなります。その後も同 30 年、43 年には再び水害が発生し、市内発作地区などは、水田収穫が皆無となる事態となりました。



【利根川眺望】（木下河岸の中心・下町の様子）

明治 29 年の水害を契機とした利根川高水（堤防）工事は、第一期が銚子～佐原間、明治 40 年には第二期として木下を含む取手～佐原間で工事が始まりました。木下周辺の堤防工事には、木下小学校近くに存在した庚申山^{こうしん}を切り崩し、堤防まで敷かれたレールにトロッキを用いて土砂を運びました。この時、木下の向堤にいた民家は、大正 3 年（1913）ころまでには当時閑散としていた木下駅北口前の新道沿い^{さいわいちよう}に移転し、昭和 4 年に公募した結果「幸町」と名付けられました。昭和 5 年（1930）には工事が完了し、堤防決壊による水害への不安は幾ばくか取り除かれることとなります。



【利根川の改修工事】

る間も水害はこの地域を襲い、大正 9 年（1920）には強固だったはずの煉瓦鉄扉製坎樋が破壊されます。翌年、さらに強固な鉄扉煉瓦石造の水門が設置されましたが、水門が閉鎖すると依然として水害は発生するという課題は残りました。

一方、大正元年には県による手賀沼干拓計画が持ち上がります。六軒と布佐に排水機場を設け、沼地や原野の開墾を目的としたものでしたが、地元住民の反対により無期延期となりました。

昭和 2 年（1927）には手賀沼国営干拓が決定しますが、一部の町村では沼の観光開発を進めるための反対運動が起きるなど遅々として進まず、湖北（我孫子市）から手賀沼を通り船橋から東京湾へ排水する昭和放水路計画も昭和 13 年に出されますが、太平洋戦争により中止となりました。

昭和初期から干拓計画と計画倒れが続く中で、地域の人々は終戦までに 2 度にわたる大きな水害を経験します。昭和 13 年 6 月下旬から梅雨前線と台風による豪雨で、亀成や発作で家屋が浸水し、大森や木下の市街地でも冠水する事態となりました。この水害で稲作農家の収穫は皆無となりましたが、女性たちが東京方面へ野菜を売りに行く行商が盛んとなる契機となりました。



【昭和 13 年の水害】（六軒四つ角付近）



【列車を待つ行商の人たち】

続いて昭和 16 年にも台風による利根川の増水で水門が閉鎖し、沼が増水します。発作や亀成などの耕作地が水没し、大森でも目抜き通りが冠水する被害がありました。これらの水害では、水門が閉鎖され排水できなかったため、水が引いたのは約 1 か月後のことでした。

4. 手賀排水機場の完成

戦後直後の昭和 20 年には印旛沼手賀沼治水期成同盟が結成され、農林省へ事業計画案の提出と陳情が行われました。翌年、食糧増産などを目的に印旛沼・手賀沼の水路開削と干拓が国営事業として決定します。

昭和 30 年には手賀沼の干拓工事は印旛沼から分離されますが、その間もカスリン台風などによる洪水に見舞われた手賀沼周辺の人々は、地元の名士であった大菅喜一氏などを中心として排水機場設置準備の機運が高まります。そしてついに昭和 31 年、六軒川と弁天川の合流地である木下地先に、手賀排水機場が完成しました。この排水機場は大量の水をポンプで押し上げ(揚水)利根川へ排水することができ、当時、排水機能は東洋一と称されました。



【手賀排水機場】

その後は着々と干拓工事が進められ、昭和 43 年には沼の約 4 割の干拓が完了し、現在の手賀沼の形となりました。ここによりやく、江戸時代から続いた干拓事業がようやく終わりを迎えたのです。

しかし、本格化した干拓事業と戦後の高度経済成長による急激な都市化と人口増加より、生活排水が大量に流れこんだ手賀沼は水質が悪化します。「死の沼」とも呼ばれた手賀沼を洪水から守り、水質浄化と都市用水の確保を図るため北千葉導水路の計画が決定します。手賀沼増水時や江戸川渇水時の送水、利根川と江戸川への排水、水の浄化と循環を目的として手賀沼東端・西端・江戸川合流地点にそれぞれ機場が建設され、平成 12 年(2000)に完成、手賀沼周辺と首都圏の人々の生活を守っています。

なお、築後 66 年が経過した手賀排水機場は、機場の改修と排水ポンプの増強が今後予定されています。

印西市立木下交流の杜歴史資料センター

〒270-1326 印西市木下 1489 番地 1

E-mail : rekicenter@city.inzai.chiba.jp

TEL : 0476-40-3500 FAX : 0476-40-3501

<https://www.city.inzai.lg.jp/0000005283.html>